職員バンド

【教師の心と体が開かれていなければ、子どもは自由になれない。】

私は教頭をさせていただいたある中学校で、職員バンドを作った。なぜそのようなことになったのかの記憶は定かではないのだが、きっと飲み会の中でそんな話になったのだろう。

12月から、練習を始めた。それぞれ忙しい中なので、放課後、時間のある者が集まって自主練習をする。職員の約半数で構成するバンドであるが、1人も集まらない日もあった。しかし、バンドにはある目標があった。その目標とは、2ヶ月後に町のデイサービスセンターでコンサートを開くことであった。コンサートの実現には、町教委をはじめ、町関係者にお世話になった。観客は高齢者のみなので、披露する曲はすべて古い曲である。若い先生の多くは曲自体を知らないので、私はCDに録音して配り、曲を知ってもらうことから始めなければならなかった。

これで間に合うのかと思うほど、練習は遅々として進まなかったが、さすがは教師集団。ちゃんと帳尻を合わせ、何とか人前に出せるものとなった。

デイサービスセンターの集会室のようなところに、高齢者の方々が集まってくる。車いすで来る人、杖をついてゆっくり歩く人、職員の方に手を借りてくる人、30～40人は集まっただろうか。1時間ほどの演奏後、茶話会を持った。「天城越え」を歌った女性の先生は握手攻めにあっている。30分ほどの間、私たちは感謝の言葉と昔話、そして教育への期待など、多くの話をお聞きした。町の職員の方々や、利用者の家族の方もおられた。

「来年も必ず来る！」と約束し、私たちはお別れした。学校で味わえない清々しい気持ちが私たち全員にあった。